

つくられる“愛国”とその受容——「愛国百人一首」をめぐる

松澤 俊二

はじめに

情報戦、宣伝戦でもあったアジア・太平洋戦時下に、国民を動員するために尽くされていた様々な手管については歴史学やメディア史、文学の領域等で既に多くの研究蓄積がある¹。

文学報国会の主導で編まれた「愛国百人一首」²（※以下「百首」と略記）についても〈国民の意識を統御し米英覇権主義に武力でもって対峙する〉ように説くプロパガンダだったとの指摘があり³、そこに採られた歌の内容分析からは、人々に対して〈戦争を正義のいくさと認識し、それに生命を捧げることの意義を、天皇とのつながりにおいて承認させよう〉とする意図があったとの考察がある⁴。加えて報国会や企画を推進した大阪毎日新聞等が行った様々な普及・宣伝活動の実態なども明らかにされている⁵。

戦争を合理・正当化する思想であり、またその命を天皇や国に捧げるよう人々を主体化する具体的な作用でもあった「百首」について、未だ検討が不十分と思われるのは、①個人々の身体や感覚がその作用をどう受け止め応じたかという受容の問題であり、更に踏み込んで展開されるべきは、②「百首」におけるその思想の構築性を明らかにして解体にむけた実践を行うことでなかろうか。

課題①について、〈戦時中もさして行われず、まして敗戦後は雲散霧消してしまって、今日誰一人かえりみるものもなくなってしまっている〉（木俣修）⁶、〈当局の熱心な推奨にもかかわらず、それはほとんど国民の関心を引かなかった。たとえば、当時文科の学生であった私の級友たちのだれもが手にとらなかった〉（高崎隆治）⁷という証言があり、これらを見る限り受容は限定的だったと判断できる。しかし高崎の言う〈私たち〉の「百首」体験が〈国民〉の経験にまで敷衍出来ないことも明らかだ。例えば、次に挙げる国民学校6年の少女のように多くの例外が見つかる。

夜宿舎に帰ってから『愛国百人一首』をしました。いちどもやったことのない方もありました。双六もしました。そして歌を歌ったり芸をしたりしました。大変楽しい一日でした。疎開学園のお正月きっときっと一生のいい記念になることでしょう。

HP「絵日記による学童疎開600日の記録」⁸

木俣や高崎の言説は「百首」を否定するあまり、それに関係した個人々の記憶を押しつけてしまう。結果、その分配の過程にどのような暴力性が存したか、あるいは時に人々がそれを進んで受容するに至った主体化のプロセスまで隠されてしまう。今求められるのは、それに関わった人々の具体的な記憶、体験を集めて「百首」を巡る当時のリアリティを辿り直すことだろう。

1

これら諸領域における代表的成果に佐藤卓巳「連続する情報戦争—『15年戦争』を超える視点」(テッサ・モーリス＝スズキ他編『アジア・太平洋戦争三巻』2006、岩波書店)、一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』(2004、吉川弘文館)、川村邦光『聖戦のイコノグラフィ』(2007、青弓社)、戸ノ下達也『音楽を動員せよ』(2008、青弓社)、坪井秀人「〈叙情〉と戦争—戦争詩の主体における公と私」(前掲『アジア・太平洋戦争』所収)など。

2

「愛国百人一首」については『和歌文学大事典』(1956、明治書院)の記述が整理されている。〈太平洋戦争が激烈を極めている際、日本文学報国会と毎日新聞社が協力し、これを選定したもの。国民精神作興が目的の一つで、後援するものに情報局と大政翼賛会があった。楠本人麻呂から橋曙覧に至る愛国歌一〇〇首を選出。昭和十七年(一九四二・一一)発表。選定委員は、佐佐木信綱・尾上柴舟・太田水穂・窪田空穂・齋藤瀏・齋藤茂吉・川田順・吉植庄亮・折口信夫・土屋文明・松村英一の十一名)。項目執筆者は、選者であった松村。

3

堤玄太『愛国百人一首』を読む』(『帝国の和歌』2006、岩波書店)

4

安永武人「戦時下・短歌にみる十五年戦争の位相」(『同志社国文学』1991・3)

5

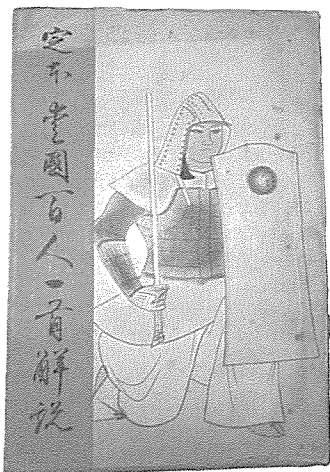
櫻本富雄『日本文学報国会』(1995、青木書店)、吉野秀雄『文学報国会の時代』(2008、河出書房新社)、また島内景二の「解説」(『愛国百人一首』2005、河出書房新社)。

6

『昭和短歌史』(1964、明治書院)。同見解は前書を参考文献とした『現代短歌大事典』(2000、三省堂)にも継承された。

7

『生きて再び逢ふ日のありや—私の昭和百人一首』(1987、梨の木舎)



8 HP「絵日記による疎開児童600日の記録」参照。「平和記念プロジェクト21」作成。
(<http://www.h5.dion.ne.jp/~s600days/osyougatu.htm>) 2011・9・20確認。

9 『百人一首への招待』(1998、筑摩書房)

10 復刊は再評価の著しい例である。例えば西内雅『国魂—愛国百人一首の解説』(1985、錦正社)、『解説愛国百人一首』(1991、三重県教育県民会議)、『たまのまひまき父母を恋ふる歌』(2001、動向社)など。

11 前掲櫻本、注5より。

12 「空襲時に於ける門司文報実践事項記録」(北河賢三『資料集総力戦と文化』2001、大月書店)

13 同中学校「修練指導要案」中の配当表より。寺崎昌男『総力戦体制と教育』(1987、東京大学出版会)所収。

また吉海直人は「百首」の〈編纂の目的が軍国主義的であったため、終戦後は積極的に忘れ去られてしまいました〉と指摘するが⁹、この積極的な忘却は同集を再評価する声を今に呼び起こす遠因となったと考えられる¹⁰。忘却よりその思想の再審、解体に向けた課題②が重要なのはそのためである。方法などは後節に譲るが、以上2点を本稿の課題として、はじめに挙げておく。

※以降の和歌の引用及び解釈は、特に注記の無い限り、公式評釈本『定本愛国百人一首解説』(1943、毎日新聞社)を参照している。画像は同書。

1

最初に課題①について、「百首」を人々がどう受容したか確認したい。

前掲吉海によれば「百首」は〈わずか二年余りの間に、四〇種以上も製作され、再版を含めて軽く百万を越す部数が出版〉された。もっとも多量の部数がそのまま「百首」の受容を示すわけではない。〈店頭にうず高く積まれた評釈つきのそれを、学生たちはおぞましいものでも見るように横目で見えて避けていた〉(前掲高崎)場合も考えられるからだ。けれどもその流通については「百首」が活字メディアとしてだけでなく、様態を様々に変えて社会に浸潤したことを考えておく必要がある。

櫻本富雄が大阪毎日や朝日等の新聞記事を追って記すところによれば、選定以降、〈大騒ぎの普及運動〉が行われ、朗誦会、解説講座、カルタ製造、教科書に採用、点字化、ラジオ放送、競技規則の制定、揮毫展、阪神パークでの展覧会、銀座の250店舗のショーウィンドでの掲示がなされた¹¹。街を歩けば揮毫展や商店の掲示に出くわすこともあったろうし、ラジオ放送を通じた朗誦は家庭に入り込んでいた。映画の幕間放送で観客に、さらに労働者には工場放送で「百首」が流されたことも現在わかっている¹²。特に和歌は音声化されてしまえば耳への流入は拒み難い。こうして「百首」がバリエーション化され、街頭、家庭、娯楽や労働現場まで入り込んだことで、評釈本を手取る取らぬといった個々人の選好はほぼ無化されてしまう。

また「百首」の普及過程で、その暴力性が最も認められるのは教育カリキュラムを通じた場合である。例えば千葉県匝瑳中学校では「百首」の「記誦」が学校児童に課せられた。〈皇国民トシテ一生ノ指針〉を得さしめることを目的に行われた「記誦」は、〈材料ノ含み精神ヲ味得〉させるため、〈静坐ノ礼法〉を遵守する必要があった。「百首」の〈精神〉の獲得は個々の身体動作の矯正と並行的に行われた¹³。

『愛国百人一首』なるものが突然世に現われ、新聞が日々にその解説を連載し、翌年にはその評釈書も出現し、学校でもしばしばその暗詠・朗詠等が課せられたことがあった。…(中略)…そして僕らはこのような歌に宿る〈至高の日本精神〉〈純忠の心〉といった類のことを、教室の机の間の板の間に正座して背筋を真っ直ぐに伸すよう求められ、瞑目して息を殺しながら、繰り返し繰り返し説き聞かされたのであった。

谷口巖「童戯百人一首注解—開化風俗の〈ざれ歌〉」(「国語国文学報」1985・3)

谷口の場合も、先の匝瑳中学校の例と同様に「百首」の〈暗記、朗詠〉が課せられ、かつ身体にも矯正は及んでいた。教師は、生徒に板の間での正座、背筋を伸ばし瞑目するよう求めている。そのうえで教師は歌を用いて〈至高の日本精神〉、〈純忠の心〉などを重ねて説いた。身体、視覚等の発動をあらかじめ奪うのは、和歌の内容にのみ生徒を集中させて、その意を心身に徹底させるためだろう。このように一度「百首」がカリキュラムに組み込まれれば個々の生徒の選好は問題とならない。歌々は、基本的には、教師の意味づけるままに生徒へと伝達されてゆく¹⁴。かくして教室は最も効率的に「百首」の普及を進めた機関となった。

ただし学校での普及が常に一方的だったわけでない。例えば金子房子（※当時淑徳女学校専攻科に在籍）の場合である。

小倉百人一首はこの戦時下に軟弱だという理由で愛国百人一首が大いに奨励されました。まだ市販もされておらず、それではと、お習字の練習も兼ねて私たちがカルタを作り上げました。これでお正月にクラス対抗戦を行なうというわけです。小倉百人一首には、いささかの自信もありましたが、この新しい百人一首を覚えるのが大変でした。通学の汽車の中で、お友達と必死に暗記したものです。

金子房子「戦時下の青春」（『戦争と新居』1997、新居町教育委員会）

カルタまで自作した金子は、進んで「百首」を受容したものと見える。その自発性は、彼女が以前から「小倉百人一首」（※以下「小倉」と略記）に自信があったことを前提に、新しい「百首」も早く習得したいと考えたこと、他クラスへの対抗心を刺激されたことから引き出されたようだ。つまり「百首」が、「小倉」を踏襲してカルタ取りという競技の様態を取ったことがこの場合重要だった。もっともかかる自発的な受容と、報国会などの企図した「愛国」の意味伝達が上手く結びついたかは保留しておく必要がある。

例えば当時流通していたカルタの「早取り法」は「決まり字」や「友札」などを指摘して、他の参加者に先駆けて札を取るためのノウハウを明かす¹⁵。このように参加者が競技にいかにか勝つかという問題を意識するほどに、その場では和歌はいちいち味読されず、逆に「早取り法」が重宝されただろう。報国会や内閣情報局が〈鍛錬〉や〈武士道精神〉といった語彙を散りばめて用意した「競技大則」も存在するが¹⁶、それをよそに参加者は新しい「百首」をゲームとして使用し、楽しんだ可能性がある。

14

「百首」の例では無いが国民歌謡「海ゆかば」の歌詞は、児童達に「大君の屍にこそ死なぬ」と解釈され歌われたという証言がある。教師と生徒の思惑は必ずしも合致しない。小沢昭一『僕のハーモニカ昭和史』（2011、朝日新聞出版）を参照。

15

たとえば紀野俊頼「愛国百人一首早取り法」（『週刊朝日』1943・1）、村松久義「愛国かるたの必勝法」（『サンデー毎日』1943・1）、朋文堂書店編・刊行『愛国百人一首附早取法』（1943）などを参照。

16

「競技大則」によれば、カルタ取りは〈皇居遙拝〉に始まり、〈武士道精神〉で戦ったのちは〈衣服を正して端座し、この百人一首の作者達に対する感謝の意味と自己の鍛錬の相手に対し〉て〈鄭重に一札する〉所作が指定された。「武士道精神で闘へ」（『朝日新聞』1942・12・30）参照。



写真は西澤笛歌画による「愛国百人一首絵入りかるた」日本玩具統制協会発行、売価は2円80銭

17

日本文学報国会『定本愛国百人一首』(1943、毎日新聞社)

18

小泉吉永「女子用往来と百人一首」(白幡洋三郎編『百人一首万華鏡』2005、思文閣)によれば、近世期の女子用往来において「百人一首」は約4割を占めた。

19

岩井茂樹「恋歌の消滅—百人一首の近代的特点について」(『日本研究』2003・3)、ジョシュア・モストウ『『みやび』とジェンダー—近代における『伊勢物語』』『創造された古典』所収、1997、新曜社)などの議論を踏まえて概括すれば、対外戦争を多く経験し、国家や国民の強さが要請される明治以降、主として貴族による“軟弱”で“女々しい”それらの和歌が批判された。

20

跡見学園女子大学短期大学図書館編・発行『異種百人一首関係資料目録』(1999)を参照。

21

伊藤論文からはサンプルの(A)、(C)、(D)、(E)、(F)を参照。他は家蔵分。

22

これらの「異種」が教育対象として想定したのは以下のような人々、現場である。(A) 児女子、(B) 人々のをしへ、(C) 家庭のもてあそびぐさ、(D) 児女の読物、家庭の読物、(E) 今の世の児童、家庭の読み物、(F) 今の世の児童、家庭の読み物、(G) 読者、(H) 不明、(I) 不明、(J) 健全たるべき家庭、となる。

2

報国会編の公式評釈本は「百首」の意義、役割を〈和歌をとほしての現在の指導精神〉と説明している。すなわち天皇や皇祖、国土を讃え、〈天皇の民として生を享けたることを歡ぶ情〉である“愛国”が〈和歌の形式をもつて伝へられてゐることを一般に味解せしめることがその役割という¹⁷。その意味で「百首」を製作した側は、それが人々を教化、訓育するためのメディアだと自認していた。

もっとも「百人一首」を教育メディアとして用いる発想は珍しくない。たとえば「小倉」は、近世期には女子教育の有力なテキストだった¹⁸。明治期以降、特にそのことが批判されても¹⁹、「小倉」の形式を模倣したいいわゆる「異種百人一首」(※以下「異種」と略記)の類が次々と誕生、一部は教育メディアとしての面を着実に踏襲し、「百首」もこの流れのなかに現れたのである。

そして問題は、近代以降に現れた「異種」群と「百首」では何が共通し、異なるかであるが、実はこの間は課題②にも接続する。というのも間に応じるには、まず折々の「異種」に採られてきた和歌と歌人を明らかにし、そのうえで「百首」に採られたそれと比較・検討することが必要だ。ある歌や歌人がどの「異種」に採られ、「百首」で省かれたのか。継続して採られた歌ならばその意味づけに違いはあるか。この「異種」群と「百首」における和歌と歌人の取捨選択、また和歌解釈の在り方を考察する作業からは、「百首」に含意された幾つかの“愛国”や、天皇や国に命を捧げることを説く思想が、どのように現れ、維持され、特権化されたかなど諸種の構築過程が辿り直されるだろう。ともあれ、まずは「百首」と比較するための「異種」選びから開始したい。

『異種百人一首関係資料目録』を見ると明治以降最低でも74集が発行されており、掲げるテーマも多様である²⁰。ただし〈現在の指導精神〉を標榜する「百首」と比較するには、なるべく目的が類似するものが望ましい。そこでタイトルや題言などに教育、教戒目的を掲げているものを選ぶ。また「異種」は有・無名さまざまな人が編んでいるが、後者の場合、実物が手に入らず詳細を確認しえないケースもあった。そこで教育メディアとしての「異種」の詳細な紹介である伊藤嘉夫「異種百人一首十種(三)—道歌・教誡に関するもの」(『跡見学園女子大学紀要』1973・3)で閲覧し得た集を、家蔵分と併せ提示することとした²¹。そうして選択した1881~1943年までに編まれた10のサンプルを以下に示す²²。

- (A) 西村茂樹「新選百人一首」(1883、中外堂)
- (B) 佐佐木信綱「修身百人一首」(1893、博文館)
- (C) 杉谷正隆「家庭家訓修身百人一首」(1897、国光社)
- (D) 斎藤由松「教育百人一首」(1904、新潟文港堂)
- (E) 高柳秀雅「精神教育和魂百人一首」(1904、金港堂)
- (F) 後藤和子「教訓百人一首」(1906、台湾日々新報社)
- (G) 三輪田真佐子「教訓百首註解」(1908、榊原文盛堂)
- (H) 芳賀矢一「国体百首」(『日本人』収載、1912、文会堂)
- (I) 川田順「愛国百人一首」(1941、講談社)
- (J) 金子薫園「皇国百人一首」(1942、文明社)

【表1】

| | 作者 | 「愛国百人一首」の和歌 | A 新選百人一首 | B 修身百人一首 | C 家庭家訓修身百人一首 |
|----|--------|-------------------------------|----------|----------|--------------|
| 1 | 柿本人麻呂 | 皇は神にしませば天雲の雷の上に庵せるかも | ほのぼのと | | |
| 2 | 長奥麻呂 | 大宮の内まで聞ゆ綱引すと綱子とどのふる海人の呼び声 | | | |
| 3 | 大伴旅人 | やすみししわが大君の食国は大和も此処も同じとぞ念ふ | | | |
| 4 | 高橋虫麻呂 | 千万の軍なりとも言拳せず取りて来ぬべき男とぞ思ふ | | | ● |
| 5 | 山上憶良 | をのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして | | 白がねも | 白金も |
| 6 | 笠金村 | ますらをの弓末振り起し射つる矢を後見む人は語りつぐがね | | | |
| 7 | 山部赤人 | あしひぎの山にも野にもみ獵人さつ矢手挟みみだれたり見ゆ | 田子の浦ゆ | | |
| 8 | 遣唐使使人母 | 旅人の宿せむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群 | | | ● |
| 9 | 安倍女郎 | わが背子はものな思ほし事しあらば火にも水にも吾なげなくに | | いまさらに | ● |
| 10 | 海犬養岡麿 | み民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば | | | ● |
| 11 | 雪宅麻呂 | 大君の命かしくみ大船の行きのまにまに宿りするかも | | | |
| 12 | 小野老 | あをによし奈良の京は咲く花のほふがごとく今さかりなり | | | |
| 13 | 橘諸兄 | 降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか | | ● | |
| 14 | 紀清人 | 天の下すてに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか | | | |
| 15 | 葛井諸会 | 新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪のふれるは | | | |
| 16 | 多治比麿主 | 唐国に往き足らはして帰りに来むすらす武雄に酒たてまつる | | | |
| 17 | 大伴家持 | すめるぎの御代栄えむと東なるみちのく山にくがね花咲く | かささぎの | 丈夫は | ますらをを |
| 18 | 丈部人麻呂 | 大君の命かしくみ磯に触り海原渡る父母おきて | | ● | ● |
| 19 | 坂田部麻呂 | 真木柱ほめて造れる殿のごといませ母刀自面変りせず | | | ● |
| 20 | 大舎人千文 | 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は来にしを | | | |
| 21 | 今奉部與曾布 | 今日よりはかへりみなくて大君のしこの御盾と出で立つ吾は | | | ● |
| 22 | 大田部荒耳 | 天地の神を祈りてさつ矢ぬき筑紫の鳥をさして行く吾は | | | |
| 23 | 神人部子忍男 | ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふいのちは母父がため | | | |
| 24 | 尾張浜主 | 翁とてわびやは居らむ草木も木も榮ゆる時に出でて舞ひてむ | | | |
| 25 | 菅原道真 | 海ならずたへる水の底までも清き心は月ぞ照らさむ | このたびは | | |
| 26 | 大中臣輔親 | 山のごと坂田の稲を抜き積みて君が千歳の初穂にぞ春く | | | |
| 27 | 成尋阿闍梨母 | もろこしも天の下にぞ有りと聞く照る日の本を忘れざらなむ | | ● | ● |
| 28 | 源経信 | 君が代はつきじとぞ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限は | 夕されば | | |
| 29 | 源俊頼 | 君が代は松の上葉におく露のつもりて四方の海となるまで | うづら鳴く | | 武士の |
| 30 | 藤原範兼 | 君が代にあへるは誰も嬉しきを花は色にも出でにけるかな | | ● | |
| 31 | 源頼政 | み山木のその梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり | 都には | 君が代は | |
| 32 | 西行法師 | 宮柱したつ岩根にしき立ててつゆも曇らぬ日の御影かな | いづくにも | | |
| 33 | 藤原俊成 | 君が代は千代ともささじ天の戸や出づる月日のかぎりなければ | 世の中は | | ますらをに |
| 34 | 藤原良経 | 昔たれかかかる桜の花を植ゑて吉野を春の山となしけむ | きりぎりす | | 世の中に |
| 35 | 源実朝 | 山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも | 世の中よ | ● | ● |
| 36 | 藤原定家 | 曇りなきみどりの空を仰ぎても君が八千代をまず祈るかな | 駒とめて | | |
| 37 | 宏覚禪師 | 末の世の末の末まで我が国はよろづの国にすぐれたる国 | | | |
| 38 | 中臣祐春 | 西の海よせくる波も心せよ神の守れるやまと島根ぞ | | | |
| 39 | 藤原為氏 | 勅として祈るしるしの神風に寄せくる波はかつ砕けつつ | | 足乳根の | ありし世の |
| 40 | 源致雄 | 命をばかるきになして武士の道よりおもき道あらめやは | | | |
| 41 | 藤原為定 | 限なき恵を四方にしき島の大和島根は今さかゆなり | | | |
| 42 | 藤原師賢 | 思ひかね入りにし山を立ち出でて迷ふうき世もただ君の為 | | | ● |
| 43 | 津守国貴 | 君をいのる道をいそげば神垣にはや時つげて鶏も鳴くなり | | ● | |
| 44 | 菊池武時 | ものふの上矢のかぶら一筋に思ふ心は神ぞ知るらむ | | 故郷に | |
| 45 | 楠木正行 | かへらじとかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとむる | | ● | ● |
| 46 | 北畠親房 | 鶏の音になほぞおどろく仕ふとて心のたゆむひまはなけれど | | | |
| 47 | 森迫親正 | いのちより名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなれば | | | |
| 48 | 三條西実隆 | あふぎ来てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ | | | |
| 49 | 新納忠元 | あぢきなやもろこしまでもおくれじと思ひしことは昔なりけ | | | |
| 50 | 下河辺長流 | 富士の嶺にのぼりて見れば天地はまだいくほどもわかれざりけり | | | |
| 51 | 徳川光国 | 行く川の清き流れにおのづから心の水もかよひてぞすむ | | 白雪の | |

| | D 教育百人一首 | E 精神教育和魂百人一首 | F 教訓百人一首 | G 教訓百首註解 | H 国体百首 | I 川田版愛国百人一首 | J 皇国百人一首 |
|----|----------|--------------|----------|----------|--------|-------------|----------|
| 1 | ほのぼのと | | | こそ見てし | ● | ● | ひむがしの |
| 2 | | | | | | | |
| 3 | | | | | | ● | |
| 4 | ● | ● | | ● | ● | ● | ● |
| 5 | 白金も | 白金も | | 白金も | ● | | 白金も |
| 6 | | | | | | もののふの | |
| 7 | | | | 田子の浦ゆ | 田子の浦ゆ | | わかかの浦に |
| 8 | | | | | | | |
| 9 | ● | | | | | | |
| 10 | | | | | ● | ● | ● |
| 11 | | | | | | ● | |
| 12 | | | | | | ● | ● |
| 13 | | | | | ● | ● | ● |
| 14 | | | | | | | |
| 15 | | | | | | | |
| 16 | | | | | | | |
| 17 | ますらをは | 劔太刀 | ますら男は | つるぎ太刀 | 劔太刀 | 敷島の | ますらをは |
| 18 | | | | | ● | ● | ● |
| 19 | | | | | | | |
| 20 | | | | | | ● | |
| 21 | | | ● | | ● | ● | ● |
| 22 | | | | | | | |
| 23 | | | | | | | |
| 24 | | | | | | | |
| 25 | | ● | ● | こゝろだに | ● | ● | 東風吹かば |
| 26 | | | | | | | |
| 27 | ● | | | | | | |
| 28 | | | | | | ● | 夕されば |
| 29 | | | 武士の | うづら鳴く | | | 風ふけば |
| 30 | | | | | ● | | |
| 31 | | | | 君が代は | 君が代は | | ● |
| 32 | 大海の | 大海の | | なにごとの | | | なに事の |
| 33 | | | たちかへり | ますらをは | 神風や | | 伏見山 |
| 34 | わが国は | | わが国は | 民もみな | わが国は | 我が国は | 人住まめ |
| 35 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 36 | | | 百千どり | 駒とめて | 玉ほこや | | 駒とめて |
| 37 | | | | | | ● | |
| 38 | | | | | ● | ● | |
| 39 | 垂乳根の | | | | | ● | |
| 40 | | | | | | | |
| 41 | | | ● | | | | |
| 42 | | ● | | | ● | ● | 思ふこと |
| 43 | | | | | | | |
| 44 | ふるさとに | ● | | ふる郷に | ● | ● | ● |
| 45 | ● | ● | ● | ● | ● | ● | ● |
| 46 | | 片糸の | | | | 片糸の | |
| 47 | | | | | | ● | |
| 48 | | | | | ● | | |
| 49 | | | | | | ● | |
| 50 | | | | | | | |
| 51 | 白雪の | みなちりし | | 池水に | 立ちならふ | | |

| | 作者 | 「愛国百人一首」の和歌 | A 新選百人一首 | B 修身百人一首 | C 家庭家訓修身百人一首 |
|-----|--------|-------------------------------|----------|----------|--------------|
| 52 | 荷田春満 | ふみわけよ日本にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かは | ほのぼのと | | ● |
| 53 | 賀茂真淵 | 大御田の水泡も泥もかきたれてとるや早苗は我が君の為 | | | 飛騨たくみ |
| 54 | 田安宗武 | もののふの兜に立つる鍬形のながめ柏は見れどあかざけり | | | |
| 55 | 楢取魚彦 | すめ神の天降りましける日向なる高千穂の嶽やまつ霞むらむ | | | |
| 56 | 橘枝直 | 天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は残り | | | 野辺に生ふる |
| 57 | 林子平 | 千代ふりし書もしるさず海の国のまもりの道は我ひとり見き | | | |
| 58 | 高山彦九郎 | 我を我としろしめすかやすべらぎの玉のみ声のかかる嬉しさ | | | |
| 59 | 小沢蘆庵 | あし原やこの国ぶりの言の葉に栄ゆる御代の声ぞ聞ゆる | | | ● |
| 60 | 本居宣長 | ししまのやまと心を人とはば朝日にほふ山ざくら花 | | ● | ● |
| 61 | 荒木田久老 | 初春の初日かがよふ神国の神のみかげをあふげもろもろ | | | |
| 62 | 橘千陰 | 八束穂の瑞穂の上に千五百秋国の秀見せて照れる月かも | | | 竹の根の |
| 63 | 上田秋成 | 香具山の尾上に立ちて見渡せば大和国原早苗とるなり | | | |
| 64 | 蒲生君平 | かけまくもあやに畏きすめらぎの神のみ民とあるが楽しさ | | | |
| 65 | 栗田土満 | 遠つ祖の身によるひたる緋緘の面影浮かぶ木木のもみち葉 | | | |
| 66 | 賀茂季鷹 | 大日本神代ゆかけて伝へつる雄雄しき道そたゆみあらずな | | | |
| 67 | 平田篤胤 | 青海原潮の八百重の八十国につぎてひろめよ此の正道を | | | 雲となり |
| 68 | 香川景樹 | 一方に靡きそろひて花すすき風吹く時ぞみだれざりける | | | 唐土の |
| 69 | 大倉篤夫 | 安見しじわが大君のしきませる御国ゆたかに春は来にけり | | | |
| 70 | 藤田東湖 | かきくらすあめりか人に天つ日のかがやく邦のてぶり見せばや | | | |
| 71 | 足代弘訓 | わが国はいともたふとし天地の神の祭をまつりごとにて | | | |
| 72 | 加納諒平 | 君がため花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな | | | |
| 73 | 鹿持雅澄 | 大宮の宮敷きましし榎原のうねびの山の古おもほゆ | | | |
| 74 | 僧 月照 | 大君のためには何か惜しからも薩摩のせとに身は沈むとも | | | |
| 75 | 石川依平 | 大君の御贄のまけと魚すらも神代よりこそ仕へきにけれ | | | |
| 76 | 梅田雲浜 | 君が代を思ふ心のひとすちに吾が身ありとはおもはざりけり | | | |
| 77 | 吉田松陰 | 身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留めおかまし日本魂 | | | |
| 78 | 有村次左衛門 | 岩が根も砕かざらめや武士の国の為にと思ひ切る太刀 | | | |
| 79 | 高橋多一郎 | 鹿島なる節豊の御剣をこころに磨ぎて行くはこの旅 | | | |
| 80 | 佐久良東雄 | 天皇に仕へまつれと我を生みし我がたらちねぞ尊かりける | | | |
| 81 | 徳川齊昭 | 天さがる蝦夷をわが住む家として並ぶ千島のまもりともがな | | | |
| 82 | 有馬新七 | 朝廷辺に死ぬべき命ながらへて帰る旅路の憤ろしも | | | |
| 83 | 田中河内介 | 大君の御旗の下に死してこそ人と生れし甲斐はありけれ | | | |
| 84 | 児島草臣 | しつたまき数ならぬ身も時を得て天皇がみ為に死なむと思ふ | | | |
| 85 | 松本奎堂 | 君がため命死にきと世の人に語り過ぎてよ峰の松風 | | | |
| 86 | 鈴木重胤 | 天皇の御盾となりて死なむ身の心は常に楽しくありけり | | | |
| 87 | 吉村馬太郎 | 曇りなき月を見るにも思ふかな明日はかばねの上に照るやと | | | |
| 88 | 伴林光平 | 君が代はいはほと共に動かねば砕けてかへれ沖つしら波 | | | |
| 89 | 渋谷伊予作 | まずらおが思ひこめにし一筋は七生かふとも何たはむべき | | | |
| 90 | 佐久間象山 | みちのくのそとなる蝦夷のそとを漕ぐ舟より遠くものをこそ思へ | | | |
| 91 | 久坂玄瑞 | 執り佩ける太刀の光はもののふの常に見れどもいやめつらしき | | | |
| 92 | 津田愛之助 | 大君の御盾となりて捨つる身の思へば軽き我が命かな | | | |
| 93 | 平野国臣 | 青雲のむかふす極すめらぎの御稜威かがやく御代になしてむ | | | |
| 94 | 真木和泉 | 大山の峰の岩根に埋めにけりわが年月の日本だましひ | | | |
| 95 | 武田耕雲斎 | 片敷きて寝ぬる鎧の袖の上に思ひぞつもる越の白雪 | | | |
| 96 | 平賀元義 | 武夫のたけきかがみと天の原あふぎ尊め丈夫のとも | | | |
| 97 | 北島親房 | 後れても後れてもまた君たちに誓ひしことをわれ忘れめや | | | |
| 98 | 野村望東尼 | 武士のやまと心をより合はせただひとすちの大綱にせよ | | | |
| 99 | 大隈言道 | 男山今日の行幸の畏きも命あればぞおろがみにける | | | |
| 100 | 橘曙覧 | 春にあけてまず見る書も天地のはじめの時と読み出づるかな | | | |
| | | 「百首」収載歌との一致 | 0 | 8 | 14 |
| | | 歌人は「百首」と重複。ただし別の歌で入集。 | 12 | 7 | 11 |
| | | 歌人が「百首」と重複。 | 12 | 15 | 25 |

| | D 教育百人一首 | E 精神教育和魂 百人一首 | F 教訓百人一首 | G 教訓百首註解 | H 国体百首 | I 川田版愛国 百人一首 | J 皇国百人一首 |
|-----|----------|------------------|----------|----------|--------|-----------------|----------|
| 52 | 知るや人 | ● | ますらをは | 逃れても | ● | ● | |
| 53 | | 飛驒たくみ | ひだたくみ | よく往きて | たふときや | もろこしの | 信濃なる |
| 54 | | | 千どりすら | ふみよまで | | | 真帆ひきて |
| 55 | | | | いまさらに | | | 皇神の |
| 56 | | | | | | | |
| 57 | 野べに生うる | ● | | | ● | 伝へては | |
| 58 | | | ● | | ● | ● | ● |
| 59 | 春日野の | | 言の葉の | おろかにも | 武士の | | おもふこと |
| 60 | ● | ● | ● | 今の世は | ● | さし出づる | ● |
| 61 | | | | | 天の原 | | |
| 62 | | | 竹のねの | | 千万の | | 隅田川 |
| 63 | | | | | | | 香具山の |
| 64 | | 国のため | | | | 比叡の山 | |
| 65 | | | | | | | |
| 66 | | | | なでしこの | 大日本 | | |
| 67 | | 雲となり | なせば成り | なさば成り | 人はよし | 思ふこと | |
| 68 | | | 石をのみ | もろこしの | すへらきは | | 照る月の |
| 69 | | 見せばやな | | | | 八千矛の | ● |
| 71 | ながれての | | いかにせむ | | 天つ神 | | |
| 72 | ● | | | | ● | | 姫島の |
| 73 | | | | | | | |
| 74 | | ● | みがきえて | | | | ● |
| 75 | | | | | | | |
| 76 | | ● | ことたらぬ | | ● | ● | |
| 77 | | ● | 親をおもふ | | 親思ふ | かくすれば | 親を思ふ |
| 78 | | | | | | | |
| 79 | | | | | | | |
| 80 | | | | | 外国の | 飯食ぶと | 朝日かけ |
| 81 | | 敵あらば | 菫生うる | 函館の | 敵あらば | 敵あらば | |
| 82 | | | | | | | |
| 83 | | | | | | ● | |
| 84 | | | | | | | |
| 85 | | ● | | | | ● | |
| 86 | 雲井にも | | | | | | |
| 87 | | ● | | | ● | | |
| 88 | なつかしき | ● | | ● | ますらをの | ● | |
| 89 | | | | | | | |
| 90 | | 老の身の | | | 梓弓 | 梓弓 | 梓弓 |
| 91 | | ほととぎす | | | いくたひも | ● | |
| 92 | | | | | | | |
| 93 | | 天つ風 | 天津風 | | たまたまに | 吾が胸の | 天つ風 |
| 94 | | 砕けても | 一すぢに | | ● | 一すぢに | |
| 95 | | ことしあらば | | | 世の為と | | |
| 96 | | | | | | | 太刀佩きて |
| 97 | | 国のため | | | | | |
| 98 | | たぐひなき | | | ● | 誰が身に | ひとたびは |
| 99 | | | | | | | |
| 100 | | | | | 恐るへし | 君と臣 | 蟻と蟻 |
| | 7 | 14 | 7 | 3 | 24 | 28 | 15 |
| | 14 | 18 | 19 | 23 | 24 | 18 | 27 |
| | 21 | 33 | 26 | 26 | 48 | 46 | 42 |

最初に、「百首」の和歌とサンプル群のそれとがどれほど重複するか、【表1】から確認する。「●」が重複を示す記号である。

その結果、(A)では重複なし。(B)、(D)、(F)、(G)ではいずれも1桁代、(C)、(E)では10を越えるが20首に届かず、明治末年に編まれた(H)でようやく20首を越える。「百首」の前年に編まれた(I)で最高の28首の重複が認められ、後年になるほどに「百首」に近づくと一応は言える。しかしサンプルを通覧して重複歌が多いとは言いがたい。

次に歌人が共通した場合を【表1】から集計すると、(A)では12人が「百首」と一致する。ただし(A)の縦列には、すべて和歌の一句目のみ記載されている。柿本人麻呂の行に〈ほのほのと〉とあるが、これはスペースの関係から歌の全体を示し得なかったが、同人の〈ほのほのとあかしのうらのあさぎりにしまがくれゆく舟をしぞ思ふ〉が²³、(A)に採られていたことを示す。「百首」では〈皇は…〉が採られたから、この場合は歌人が共通で、しかし採られた歌が異なっている。

そのように見てゆくと(A)、(B)までは歌人10人前後が共通、(C)～(G)では20人から30人代を前後し、(H)以降は40人を突破し半数に迫っている。人々を教戒するにふさわしい模範的の歌人が次第に選別、固定化された様子がうかがわれる。

一方で、「百首」の特異性はどのような点に現れるか。【表1】から指摘できるのは、サンプルに取り上げられてこなかった「百首」での初選出歌人(※表では歌人名をグレイで網掛け)が21人存在することである。また初選出歌(※表では和歌をグレイで網掛け)は52首である。これらの点に「百首」の特異性が認められるが、内訳を見てみると歌人では下河辺長流以下の12人が江戸期以降の生まれ、和歌は18首が中世期までの作で、対して34首がやはり江戸期以降の作となる。

では「百首」はなぜ江戸期の歌人、和歌を重視するのか。それは〈国家に目覚めた学者によって天皇奉仰、国体礼讃、国民の矜持が高唱され、次で、尊皇攘夷の救国実行運動に立った志士の烈々たる日本精神が慟哭の声〉²⁴となって現れていると考えられたからだ。国学者らによる思想の広宣と志士たちの実践とが一致して行われた時代であるという点に〈戦争を正義のいくさと認識し、それに生命を捧げることの意義〉(前掲安永)を教えるための有効性を見たのだろう。その意味で近世期の歌は、〈純真にして一こく〉ではあるが〈あからさまには愛国云々と云はぬ〉万葉集の歌よりも、また〈流暢な声調と繊細な技巧とに終始したので、特に国家的意識を盛ったものは無いに近い〉とされる平安、鎌倉期の歌よりも選者たちに高く評価されたのである²⁵。

23

引用は佐伯梅友校注『古今和歌集』(1958、岩波書店)

24

選者斎藤樹の評言。「朝日新聞」(1942・11・21)より。

25

上代の歌は斎藤茂吉、平安、鎌倉期の歌の評価は尾上柴舟による。書誌は注24に同じ。

3

前節の検討より、ひとまず次の2点を指摘できる。

1つは、「百首」と近代以降の教育、教戒を旨とする「異種」群との連続性である。【表1】に明らかなように歌数は多いとは言いがたいが、それ以前の集に採られてきた作が「百首」にも含まれる。例えば10のサンプルのうち9集に採られた源実朝〈山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも〉や同じく9集の楠木正行

〈かへらじとかかねて思へば梓弓なき数に入る名をぞとむる〉、7集の本居宣長〈しきしまのやまと心を人とはば朝日ににほふ山ざくら花〉、6集の高橋虫麻呂〈千万の軍なりとも言挙げせず取りて来ぬべき男とぞ思ふ〉などの歌は「百首」にも選出されている。



図版は前掲「愛国百人一首絵入りかるた」より実朝、正行、宣長、虫麻呂歌の絵札

26

例えば教育勸語を巻頭や題言に掲げるものに(D)、(E)、(H)があるが、これらはその精神を和歌により人々に示そうとするものだろう。

もちろんそれぞれの集の刊行時点において歌がどう読まれていたか、解釈の差異を考慮する必要はあるが、連続性の見やすい例と言える。また概して、主君に忠誠を誓い、死を辞さず戦に出で立つという内容の歌を、なぜ「異種」群が重ねて選出してきたかという問題は、例えば教育史研究の成果などと併せて検討される必要がある²⁶。ともあれここでは「百首」が突然変異的に現れた集でなく、それ以前の「異種」との連続性のなかで現れたことを記すに留めよう。

2つ目に指摘したいのは連続性の別面で「百首」が50首、20人を越える歌、人を初選出して、人々に教育すべき内容を刷新していたことだ。その意味で、「百首」の前掲評積本が“愛国”の情は〈肇国以来現在に及び、限りなき将来に伝わるもの〉であり、〈独りわれわれのみのもではなく、祖先の血肉と共に伝へられ来つてあるもの〉と強調する見解には同意出来ない。サンプル群と比較・検討する限りでは「百首」には時代を超越した普遍性というより、むしろ1942年当時の時勢に即して急造された面が粗々と見えるからである。そのうちの3点を以下で指摘する。

I、歌人像の変容

「百首」とサンプル群を比較するとき、歌人は一致するが採られた和歌が異なる場合がある。こうしたケースでは時に次のような興味深い例が析出される。

例えば山部赤人は「百首」では〈あしひきの野にも山にもみ狐人さつ矢手挟みみだれたり見ゆ〉で入集するが、これは吉野宮に従駕した際の歌で、大君に仕える〈み狐人〉が山野に散って狐に勤しむ様子を詠じたものという。けれども赤人の代表歌として人口に膾炙していたのは、やはり〈田子の浦ゆうち出でてみればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける〉ではなかったか²⁷。というのも「小倉」に採られたこの歌は、【表1】に明らかのように(A)、(G)、(H)でも選出されており、一方「百首」の〈あしひきの…〉を採った集は見当たらないからだ。明治末期以来〈田子の浦ゆ…〉の歌をはじめと

27

和歌引用は小島憲之他校注『万葉集一』(1994、小学館)より。

する自然描写の歌に定評を得ていた赤人は²⁸、しかしアジア・太平洋戦争期に至っては、天皇のための鑑に勤しむ人々を活写する歌人として強調されたといえる。

また「百首」に〈をのこやも空しかるべき万代に語りつぐべき名は立てずして〉で入集する山上憶良の例も興味深い。男子であれば永世に語り継がれる功名を挙げるべきと説くこの歌は、その時期の出征兵士たちを叱咤すべく選出されたのだろう。しかしサンプル群の(B)、(C)、(D)、(E)、(G)、(J)の6集は〈銀も金も玉もなにせむに優れる宝子に及かめやも〉の歌を選出しており²⁹、〈をのこやも…〉は(H)に採られたに過ぎない。つまり種々の宝よりも子が勝ると詠う子煩悩の歌人憶良が「百首」以前には支持されていたと了解されるのだが³⁰、しかし「百首」が強調したのは、功名を挙げるように厳しく男子を叱咤する憶良像であった。

では憶良像はなぜ変更されるのか。手がかりとして、同じく親子関係が詠まれた歌を「百首」より抜くと、例えば遣唐使使人母〈旅人の宿せむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群〉、神人部子忍男〈ちはやぶる神の御坂に幣奉り齋ふいのちは母父がため〉などがある。一見親子間の情愛が詠われているようだが、前者は遣唐使として旅中にある息子に寄せた母の、後者は防人にゆく当人の歌であることに注意したい。また丈部人麻呂〈大君の命かしこみ磯に触り海原渡る父母おきて〉、佐久良東雄〈天皇に仕へまつれと我を生みし我がたらちねぞ尊かりける〉なども目に留まるが、これらの歌では親子の情が天皇や大君への「忠」に包括され一本化されている。親子の情愛よりも公務が先立ち、また「考」より「忠」を重要視するのは当時の公的モラルと同様だが³¹、憶良像の変更もそれに追随した結果だろう。

II、富士と桜

次に富士山と桜が詠まれた歌に注目したい。富士を詠むのは下河辺長流〈富士の嶺に登りてみれば天地はまだいくほどもわかれざりけり〉、また橋枝直〈天の原てる日にちかき富士の嶺に今も神代の雪は残れり〉である。前者は富士に登り、そこから見下ろした感慨を述べるという歌で、下句の表現から〈天地初めて発けし時〉という古事記の創世神話が読者に想起されるだろう³²。一方後者は視点を逆にして、麓から山頂を仰ぎ見、〈神代の雪〉さらに上の〈天の原〉を觀念するという内容であり、どちらも神話的なモチーフとの関わりで富士が表現される。けれども2首はそれ以前のサンプルに採られていない初選出歌だから、その意味ではさほどポピュラリティを得ていたとは思われない。ではなぜこの2首が古来無数にある富士の歌を凌ぎ、「百首」に選出されたのか。

「百首」選定と同年の論考で久松潜一は、富士は〈時を超越して永遠に生きるものの姿〉を示し、そこには〈神〉さらには〈皇国の姿〉が見いださうと説く³³。久松は顧問として選定に加わったから、かかる見解がその際にふまえられた可能性は高い。また同時期には国定教科書でも富士山の神格化が開始されたとされる³⁴。つまりこの時期、富士山には神々しさが見いだされ、公的な言説はそれを強調し始めていた。

そうして「百首」も神話的に富士を表象する。富士を見る人々は、その山に神や皇国を觀念しながら仰ぎ見る必要があった。その意味では先に見た山部赤人〈田子の浦

28

例えば、武田祐吉『万葉集概説』『万葉集総釈 第一』(1935、楽浪書院)は、赤人の歌は〈題材としては、自然の美を賞する意味のものが、大部分を占めて〉おり、その〈自然描写の力は短歌の作品に於いて、一層その精粹を集中したやうに見える〉と評する。

29

和歌引用は小島憲之他校注『万葉集二』(1995、小学館)より。

30

森本治吉はこの歌を〈憶良の作中、最も著名であり、殊に短歌は万葉中でも、流布性の広い点で屈指の作〉とし、〈現代でも浪花節に取り入れてラヂオで放送したりしてゐる〉と昭和10年当時のこの歌のポピュラリティを証言する。『万葉集総釈 第一』(1935、楽浪書院)参照。

31

1937年に文部省より公にされた『国体の本義』では〈我が國に於ては忠を離れて孝は存せず、孝は忠をその根本としてある〉とある。

32

引用は次田真幸『古事記上』(1977、講談社)より。

33

久松潜一『日本古典の精神』(1942、大東出版社)

34

阿部一「近代日本の教科書における富士山の象徴性」(『地理学評論』1992・3)は富士山神格化の時期を、第5期教科書以降つまり1941年以降とする。

35

百首の選者でもあった窪田空穂『万葉集評釈 卷三』(1949、東京堂)は戦前から戦後にかけて刊行されたが、この歌の〈平明なる叙景〉の背後には、〈神にます不尽の山の、その潤り難い威力の頭はれ〉があると説明する。

36

例えば大貫恵美子『ねじ曲げられた桜—美意識と軍国主義』(2003、岩波書店)など。

37

田中康二『本居宣長の大東亜戦争』(2009、ペリカン社)

に……)のように〈一見、平明なる叙景の如く見え〉る歌では³⁵、不足の時代が到来していたのである。

続いて桜の歌だが「百首」には4首が含まれる。先学が指摘するように³⁶、アジア・太平洋戦時期における桜のイメージとしては、散る花に人の潔い死を重ねるそれが重要だ。また本稿の文脈に照らせば、このイメージが「百首」にどう現れるかという問題になるが、意外にもそれと考えられる歌は少なく、加納諸平〈君がため花と散りにしますらをに見せばやと思ふ御代の春かな〉くらいしか見いだせない。つまり他の歌は、逆に咲き誇る花の表現となっている。では、桜はどのようなメッセージを含意しつつ咲くのだろうか。

藤原範兼〈君が代にあへるは誰も嬉しきに花は色にも出でにけるかな〉の場合、咲くことは天皇の御代への歓迎であるし、藤原良経〈昔たれかかる櫻の花を植えて吉野を春の山となしけむ〉は桜の名所で、かつ古く離宮の置かれた吉野を賛美してその歴史を言祝ぐものだ。この歌でさらに注意したいのは、良経の生きた時代からは後年のことだが、吉野朝つまり後醍醐天皇と彼に仕えた忠臣たちのイメージを読者に想起させたであろう点である。「百首」には北畠親房、菊池武時、楠木正行らが入集しており、彼らの事跡は編者に高く評価されている。そうであれば先の良経歌で桜の名所である「吉野」から、吉野朝の歴史を経て、主君への忠誠と死というテーマが引き出され、先の加納諸平の歌の散華イメージへと接続された可能性も考えられる。

もちろん実際の享受の場でそれらの歌がどう読まれたかが問題だ。けれども例えば同じく桜を詠む本居宣長〈しきしまの……〉の歌は、田中康二の指摘によれば、もとは〈大和心の象徴として山桜を詠んだ歌〉だったはずが幕末の攘夷思想や明治期の武士道の流行に伴い誤読され続け、「百首」に入集後も流布の過程で教室などでは〈散り際の潔さを本意〉として教えられるに至ったという³⁷。このようにそもそもは散華のイメージを伴わぬ歌でも、教員など強力な解説者のいる享受の場では「誤読」され、あるいは「百首」中の他の和歌との連絡が重視されたりして、咲く桜に潔い死が重ねられ提示される可能性があったろう。

久松潜一の前掲論は、〈私ども日本人〉は〈桜の花の如く咲いて散ることによってこの永遠なる命の中に帰一〉し、〈国家の永遠なる生命と一になっている〉と説く。ここで桜は〈私ども日本人〉のメタファーであり、また〈国家の永遠なる命〉とは富士山によって隠喩される〈皇国の姿〉である。となれば富士と桜は単にナショナル・シンボルとして「百首」に現れるのではなく、〈私ども日本人〉に実践すべき振る舞いを教え、その運命を指し示すべく配置されたのである。

Ⅲ、もろこし・あめりか・八十国

ここでは外国を詠んだ歌とその問題点を概観する。「百首」中の、時勢に即して急造された諸点は、日本と諸関係(交戦を含む)を結ぶ国々の表象の仕方を検討するときに最も露わになるだろう。

「百首」中に外国が詠まれた歌は7首、〈もろこし〉が3首、〈唐〉が2首、〈あめりか〉が1首、〈八十国〉1首がある。

まず〈もろこし〉と〈唐〉を詠む歌で、成尋阿闍梨母〈もろこしも天の下にぞ有りと
聞く照る日の本を忘れざらなむ〉は、渡宋した息子の成尋に対して〈支那の絢爛たる
文化に心酔する事なく、生国の日本を、この母を忘れるな〉³⁸と呼びかけたものという。
また荷田春満〈ふみわけよ日本にはあらぬ唐鳥の跡をみるのみ人の道かは〉は、〈唐鳥
の跡〉つまり漢字よりも〈日本〉の文字やその文化の優越を説く内容である。「百首」
がこれらの歌を入集させたのは、選定時まさに日中戦争が継続中であり、相手国への
文化的な優越性を人々に教えて誇示するためだろう。

また当時日本は、アジア及びその南方を1つの広域圏に再構成せんとするいわゆる
「大東亜」の理念を現実化しようとするさなかであった³⁹。それまでの中国に代わって
アジアの中心的な指導国家となるには、自国の文化的な優越性を説きながら、一方で
三条西実隆〈あふぎ来てもろこし人も住みつくやげに日の本の光なるらむ〉のように
〈日の本の光〉を慕い自発的に寄り来る〈もろこし人〉の姿を表象する必要があった。
しかし実際は必ずしもそうではないので、多治比鷹主〈唐国に往き足らはして帰り
来むすらすら武雄に酒たてまつる〉のように〈唐国〉に派遣された過去の使節に、現在の
出征兵士達を二重写しにして讃えて⁴⁰、中国へと送り出し、かの国の人々を武力で統
御する必要があったのである。

ところで和歌を以て、その時々々の対外状況を語り直すことは、それまでの「異種」に
も見られる慣例的な方法だった。成尋阿闍梨母〈もろこしも…〉や荷田春満〈ふみわ
けよ…〉がともに日清戦争前後から採られ始めていることも興味深いが、ここでは
1912年の(日)に初選出された三条西実隆〈あふぎ来て…〉に注意しよう。時期的に
見て、この歌は、恐らく日露戦争後の中国東北部における日本の権益拡大を示すか、
あるいは2年前1910年の日韓併合と関わって、歌中の〈もろこし人〉を朝鮮の人々に
擬す目的だったのではないか。後者であれば〈日の本の光〉を慕って自ら〈住みつく〉
ことを選んだという内容は、併合に伴う諸々の暴力を隠蔽し、それを語り直すことと
なる⁴¹。

このように近代の「異種」には時々々の対外関係が刻印されるが、さらに1942年、帝
国の「百首」に新しい敵国の表象が加わる。藤田東湖〈かきくらすあめりか人に天つ日
のかゝやく邦のてぶり見せばや〉は〈あめりか人〉に「雨」がかけられて、一方で〈天つ
日のかゝやく邦〉つまり晴れ渡る日本の姿が対置されている。〈てぶり〉とは、前掲『定
本愛国百人一首』によれば〈神州日本の気風〉ということらしいが、それをアメリカに
見せつけてやると意気込む内容である。この歌は、ほぼ同時期に編まれた(日)にも採
られ、対米戦に躍起となる時勢を反映する。

本節最後に平田篤胤〈青海原潮の八百重の八十国につぎてひろめよ此の正道を〉に
ついて一瞥しておく。この歌の(八十国)は単なる諸国という程の意味ではない。選者
の1人川田順が明言するように、「百首」においては〈今日皇軍の制圧下にある南方諸
国島嶼などもこの観念中に入り〉⁴²、それらの国が〈正道〉を広めるべき対象というので
ある。つまりこの歌は日本が「大東亜」に指導者として臨もうとする理想が詠じられた
ものとして再解釈され「百首」に選出されたのである。

かくして、「百首」を含む「異種」群における和歌の選択と解釈は、その時々々の対外
状況を反映する。言い換えれば日本の対峙する「現在」の要請に応じて、自国の優越

38
注17に同じ。

39
子安宣邦『「アジア」はどう語られてきたか』(2003、藤原書店)を参照。

40
中谷幸次郎『愛国百人一首のころ』(1943、南方園社)参照。〈唐国に…〉の歌は遣唐副使として海を渡る大伴胡麻呂を作者多治比鷹主が見送ったときの作というが、中谷は〈広召の兵士を送って、その門辺に酒杯を上げる我々の気持といさゝかも違つてをりません〉という。

41
村井紀「歌会始めと新聞歌壇」(『短歌と日本人』1999、岩波書店)の指摘によれば、日韓併合の翌1911年の歌会始には「朝鮮全羅南道 許焱」という人物が詠進し、天皇の支配をその和歌で言祝いでいる。和歌が植民地下の住民の声を拾い上げて日本の統治を正当化した先例は、この例にも見いだすことができる。

42
川田順『愛国百人一首評釈』(1943、朝日新聞社)

性や他国の劣性、支配の正当性等を提示するためにふさわしい和歌が過去から召還され再解釈され「異種」群に採られてきたのである。かかるテキストの性格を鑑みるならば、「百首」には更なる変更可能性さえ存したと言えるのではないか。つまり目下のアジア・太平洋戦争の状況次第では、〈あめりか〉や〈もろこし〉等を詠む歌が取り替えられ、あるいは別の解釈が施されるという具合にである。もちろん解釈の次元はともかく、実際に歌は交換されなかったし、指摘は可能性の域に留まる。しかし、少なくとも公式評釈本の言うような時代を超越した“愛国”の普遍性を「百首」に見いだすことは出来ない。1942年当時の帝国のイデオロギーを、それは示すのみである。

終わりにかえて

ここまで「百首」が人々にどう受容されたか。また普遍性を謳われた種々の“愛国”が、さらなる変更可能性さえ孕むことを、「百首」と「異種」間における和歌の取捨選択、解釈の歴史の変容等の検討から指摘してきた。

本稿の終わりに、「百首」の発案者と自認する無名の歌人、宇佐見文雄の文章を検討したい。彼が「百首」に期待したこと、またその期待が実現すると同時に浮上した難問について考察し、これまでの指摘と絡めて「百首」の限界を透視したいと考える。

それは宇佐見の不満から始まる。彼は戦時下にもなお軟弱な恋愛歌に満ちてゐる小倉百人一首が、伝統の美名の下に依然として広く弄ばれてゐる事実に対して、耐え難い不満を覚え、〈愛国短歌の定本ともいふべき『愛国百人一首』を選定せられむことを提唱〉した。更に彼は次のように続ける。

また対米英開戦以来の赫々たるわが戦果に驚嘆し欣喜し、ある独伊等枢軸諸国に於いては、日本精神の研究熱が頓に盛んとなつたとのことであるが、この愛国百人一首こそその要求に端的に應ずるものとなるであらうし、また新に御稜威に浴することとなつた南方諸民族に対して日本精神の何たるかを理解せしむるための恰好な資料ともなるであらう。終わりにその選定には、現代歌壇の長老数氏が会員として加わつてをられる帝国芸術院がこれに当り、権威あるものたらしめて頂きたいと希望する。

宇佐美文雄「『愛国百人一首』発案の記録」（『書物展望』1943・3）

宇佐見は、ドイツやイタリアなど〈日本精神の研究熱が頓に盛ん〉な国々からの視線を意識し、かつ〈南方諸民族〉などに対しては〈日本精神の何たるかを理解せしむる恰好な資料〉として「愛国百人一首」を用いることを提案する。しかしここで〈枢軸諸国〉から求められ、また〈南方諸民族〉に指導しようという〈日本精神〉とは何か。この点について宇佐見の説明は無く、詳細は不明というよりない。

〈日本精神〉の捉えがたさに困惑するのは稿者だけで無いようだ。例えば津田左右吉は〈日本精神という或る固定したものが古今を通じて動かずに変わらずに存在するというのでは無い〉⁴³、和辻哲郎は〈それが形而上学的であるというまさにその

理由によって、直接に認識され得るものではない」と記した⁴⁴。また清水幾太郎編「日本精神文庫」には680もの多分野、多領域に渡る諸文献がリストアップされていて、その捉え難さが了解される⁴⁵。そして問題は、〈日本精神〉がかくも捉え難い形而上的な概念ならば、その実在を確信するものは、それがなかなか可視化されない不安／可視化したい欲望を抱えずにはいないという点である。

選定について宇佐見の希望は叶えられ、芸術院会員の佐佐木信綱、齋藤茂吉らを含む選者により「百首」は選ばれた。それを受けて宇佐美は〈国民の一人として、また僭越ながら提案者として、衷心より感謝の意を表する〉(前掲宇佐美)という。「百首」の意義は彼のように〈日本精神〉の実在を信じるものに、歌壇の権威たちが、確かにそれを可視化してみせた点に存するだろう。そしてそれ以外の多くの人々は、採られた和歌によって、事後的に〈日本精神〉について知ることとなった。

しかしこの「百首」の選定、〈日本精神〉の可視化は次のような難問を浮上させた。例えば長野県の教師倉田俊は「山村雑感」(「信濃教育」1943・1)に次のように記す。すなわち彼は〈日本精神はかうした直接の愛国の歌にのみ現はれるものであらうか。月雪花を詠じた自然の歌、日常身の生活の歌、内的告白の心理的な歌等は全く愛国の精神とは縁のないものであらうか〉と「百首」に疑義をつきつけている。つまり、これまで曖昧であったゆえに無数の見解を包括しえた〈日本精神〉が「百首」により可視化、固定化された瞬間から、その解釈を異にする人々の反発を受けたのである。〈日本精神〉をめぐる人々の諸種の見解が、その一元化をもくろむ「百首」の〈日本精神〉解釈を相対化し続けるという事態が到来したわけだが、そのように言う彼らが「百首」をやすやすと受容したとは到底思えない⁴⁶。

2つ目の難問は、百人一首というメディアの形式に関わっている。これまでの検討に明らかのように、近代以降に編まれた多くの百人一首は国内外の諸事情に敏感に反応し、多くの「異種」を生み出してきた。「愛国百人一首」もまた、「愛国」の普遍性を強調しながらも、国内外の諸事情を反映する点で「異種」の系譜を確かに引き継いでいる。そして問題は、戦況次第では再編の可能性さえ孕む「百首」の揺れやすさは、それが代行的に表象している〈日本精神〉の揺れやすさにも通じることだ。宇佐見は、ヨーロッパからの誰何に耐えうる、かつアジアの人々に示すに足る帝国日本のアイデンティティを「百首」に明証・確定してもらうことを期待したが、その揺れやすさは、過去から未来にわたる「自己」の一貫した持続性を、自他両国の人々に対して確信させえないという意味で致命的と言いうる⁴⁷。

もちろんこの揺れやすさは、戦況に応じて何遍でも組み直されたかもしれないしぶとさとしても捉えうるだろう。だが、いずれにしても過去の和歌が選択、召還されて、ひとつの集としてまとめあげられるまでの経過を辿り、また集を受容した人々のそれぞれの仕方に注意を向けるならば、「愛国」や「日本精神」の普遍性を語るはずのテキストが「ほころび」を見せることは必須である⁴⁸。そうした瞬間を注視して、書き留めるならば、普遍(不変)をうたわれる種々のイデオロギーに、いささかながらも抗することが出来よう。

44
和辻哲郎『続日本精神史研究』(1935、岩波書店)

45
「思想」(1934・5)掲載

46
例えば佐藤春夫「愛国百人一首小論」(「改造」1943・6)も、「小倉」を擁護する立場から、〈自然と人生とを渾然と融和せしめてひかへ目にしかもおほどかに自己の情意を深遠らにしらへ出づるわが国詩歌の伝統的な様相が全く忘れられ無視されてゐる〉と非難する。

47
E・H・エリクソン『自我同一性』(小比木啓吾訳、誠信書房、1973)はアイデンティティについて〈時間的な自己意識の一貫性と連続性の上に成り立つ主体的な自己意識〉と説く。

48
大黒俊二は〈テキストの統一性を攪乱する要素〉を「ほころび」と呼び、〈「テキスト」textとは「織られたもの」であり、織物は「ほころぶ」からである〉と説明する。(「逆なで、ほころび、テキストとしての社会」『歴史叙述の現在』所収、2002、人文書院)